

仏教を学んでわかつたこと

田 上 太 秀

本日は、平日にもかかわらず遠いところから私たちの最終講義にご来駕くださいましたことに心から感謝申し上げます。

最終講義といいますと、自分の専門分野で最も新しい研究成果を最後に披露するという講義でありましょうが、私はそれ程研究をしておりませんので、皆様の研究の足しになるような成果がなにもございません。したがいましてこれまで私が仏教研究をしてきてわかつたことの中で、皆様にも興味を持つていただけけるようなことに関していくつかを取り上げて、与えられた一時間の間に話をしてみようと考えました。

一、学恩を受けた主な先生たち

高等学校時代に水野弘元先生の仏教の授業を受けました。その時、仏教に関するることを説明されていたと思うが、私にとっては「空」という言葉だけが唯一記憶に残っています。空とは空っぽという意味ですが、ものがないという意味の言

葉ではないと説明されたようにぼんやりと記憶しています。ですが、それがどんなことかさっぱり解りませんでした。後になつて考えますと、これが私にとつての仏教思想との最初の出会いがありました。

駒澤大学に進学して個人的にご指導を受けましたのは水野弘元博士、小川弘貴博士のお二人であります。高等学校時代から面倒を見てくださいました。水野弘元博士にはインド哲学を、増永靈鳳博士には原始仏教を、衛藤即応博士には組織仏教学や密教を、保坂玉泉博士には唯識学を、それぞれ学びました。水野博士のインド哲学講義ノート（二冊）、衛藤博士の組織仏教学講義ノート（二冊）が今でも手元にあり、名講義であつたことを鮮明に記憶しています。増永博士の著書は解りやすいことで定評がありました。博士が次々と出版される著書を読み、仏教全体の知識を得ることができました。

水野博士と衛藤博士には仏教を広い視野から眺め、仏教の原点を正しく把握することだと教えられました。高校時代か

ら公私にわたつてお世話になつた小川弘貫博士の『摸大乘論』の講義を二年間受けました。さらに卒業論文も指導していただきました。先生はインド仏教を中心と講義を受けてきた私に駒澤大学で学ぶ者は『正法眼藏』を学ぶべしとおっしゃいましたので、宗学に目に向けることになりました。先生から三年の時、菩提心をテーマにした論文を書いたらという指導があり、「正法眼藏」における「菩提心」というテーマの論文をまとめました。ところがインド仏典を数多く参考にして書きましたので、博士から叱責されました。この卒業論文のテーマが私のライフワークであり、結果として博士論文となつたのです。

東京大学大学院に入学し、インド哲学専攻博士課程まで進学しました。ここでインド哲学の中村元博士、原始仏教の水野弘元博士、唯識学の結城令聞博士、密教学の勝又俊教博士、大乗仏教の平川彰博士、中国仏教の玉城康四郎博士などの有名な碩学に受けた学恩は計り知れません。本格的仏教研究はここから始まつたといつてよいでしょう。

東大大学院では原典を読む演習の授業が多く、予習に追われる日々であったことが忘れられません。修士論文の指導を賜つた玉城博士の『正法眼藏』講義を受講したことがありま

す。先生は一文一文を丁寧に読み、言葉の持つ意味をイン

ド仏典にみられる言葉と比較しながら、解釈されました。一

つの言葉の意味を五、六分の沈黙ののち、絞りだすように語り始められました。時が経つのを忘れて言葉の真意を追求される研究者の姿は今も目に焼き付いています。

中村元博士には大学院時代も駒澤大学に奉職してからも公私にわたりご指導をいただきました。特に東方研究会に研究员として所属した当初、先生から仏教用語をわかりやすく説明することの大切さを教えられました。むずかしく書いたり、話したりすることはたやすいが、専門用語を素人が理解できるように書いたり、話したりできるように心掛けなさいとよく言われました。

二、仏教を学んでわかつたこと

右に紹介した多くの先生に語り尽くせないほどの教えを受けましたが、私の仏教研究は自分の素朴な疑問を解決するところから始まりました。そして自分が納得できるものであれば、それは私の生きる指針として、信仰の柱にしたいと考えました。したがつて高度な仏教哲学を究明しようとは最初から考えていませんでした。私の研究論文や著書などを見てもわかりますように、内容はごく一般向きのものばかりです。

博士論文である『菩提心の研究』についても同じです。この研究は菩提心思想の淵源とその変遷、そして展開を文献を涉猟して論及したものですが、その内容はむずかしいところ

もありますが、全体として仏教信仰のすべては菩提心を抜きにしては有り得ないと仏典は説いている点を明らかにしたのです。つまり仏教信仰はだれでも菩提心をまず起こそから始めなければならないことを示した論文です。

このような私の研究姿勢によつて何がわかつたのか、私自身が納得した範囲で述べてみることにします。

イ、佛と神は違う

佛とは原語で**buddha**といい、真理に目覚めた人という意味です。仏教を学ぶ以前には佛は神のようになりたいをかなえてくれる方と思い、超人的な存在と私は考えていました。学んでみますと、佛は人そのものでありました。佛とは精進して自分で実現すべき理想的人間の姿であることを知りました。佛は祈りの対象ではなかったのです。目指すべき将来の「自分の姿」であることを経典から学びました。

神を信仰する宗教では神の教えにしたがつてどんなに精進しても修行しても神に成れるとは教えていません。人は神に成れないのです。対して釈尊は佛の教えにしたがつて精進すれば、誰でも佛に成れると教えられたという点ではつきりしました違いがあります。別の言い方をしますと、仏教は神がなくとも救われることを説いた唯一の宗教です。

口、佛になる道は八正道（中道）

仏教には数多くの修行法があります。どれでも覚りを得る

ための道であることに変わりはありませんが、それらの淵源を訪ねますと、八正道にたどり着きます。釈尊は最初の説法で五人の修行仲間に向かつて中道を説いた際に八正道を示されました。

『法句經』には、八正道はすべての道のうちで最も勝れ、真理を見るはたらきを清め、苦しみをなくすことができ、肉に刺さった矢を抜き、癒す方法である、と釈尊の言葉を記述しています。ここに示されていますように、八正道が仏道の基本であり、ブッダになる道であると説いていることを知りました。

ここに源を発し、種々の修行法や修行項目が増え、多様化したのです。八正道が仏教修行の基礎であることを銘記しておくべきです。

八正道は出家者も在家者も問わず、だれでも、どこででも、いつでも、日常生活の中で実行可能な修行項目です。その中身は苦行でもなく、神秘的な境地を求める修行でもあります。

ものの因果関係を熟知すること、惡行を離れ、善行を励行し、己の身心と環境の移り行きなどに關する知識を正しく記憶し、教えられたことは忘れないように、つねに心を鎮めて注意を払う生き方を説いているにすぎません。

これが佛になる最上の道だと釈尊は最初に説いた点に注意

しますと、仏教は決してむずかしい修行を教えたのではないことを知つて安堵しました。

わが国では厳しい修行をするのが仏道であると説いてきました。確かに出家者の修行は長い伝統の中で複雑な作法をもつて行われてきましたので、厳しくなってきたことは否定できません。しかし源を訪ねて八正道が修行の基本であることを見りますと、一体、極端にむずかしい修行が必要なのでしょうか。わが国では念佛も坐禅も盛んに行われていますが、八正道を実践することを説き、自らそれを実行している出家者がどれ程いるのでしょうか。

どんなに厳しい修行を重ねていても、日常生活で八正道を実践しなければ、それは仏道修行とは言えないよう思えてなりません。剃髪し、袈裟を掛けて法式に明け暮れていても、それは単なる行事であり、役者の演技にすぎないよう思えてなりません。眞の修行は八正道をまず実践することにあります。ということは、特に出家生活をしなくとも人は仏になります。この発言に対してもいつかは得ることはできるでしょう。覚りを得ることは佛になることですから、だれでもいつかは佛になります。注意すべきことは覚りを得ても解脱したことになります。

はならないのです。というのは、覚りと解脱は違うからです。覚りは教えを聞き、学び、熟慮し、そしてさらに八正道を実践して生活していくば、得られます。覚りは一度ならず、何度も新たに覚りがあり、それは深まり、高まり、熟します。しかし解脱は生身がある間はなかなかできません。だから覚りを得た後も八正道を実践しなければならないのです。釈尊が覚りを得た後も相変わらず修行を続けられたのは、覚りをえても完全な解脱を得ておられなかつたからではないでしょうか。

道元禅師も『正法眼藏』の中でいくどとなく述べておられる「発心・修行・菩提・涅槃」の表現は菩提と涅槃の違いを教えているところです。

釈尊は、解脱とは借金をすべて返済し、借金取りと縁が切れた時の安堵のように一切の煩惱から解放された境地であると説かれました。この境地は俗事に染まる日常生活では実現は不可能です。そこで出家生活が求められ、釈尊の言葉のように世俗を離れた清々しい生活を送ることで解脱は得られるということを教えられました。私は、覚りと解脱は違うことを知つて仏道修行とは何かを理解できるようになりました。

（『ブッダの人生哲学』講談社選書メチエを参照されたい）

ハ、ものには神や靈魂が内在しない

仏教は神の存在や靈魂の内在を説いている宗教と私は思いました。ところが釈尊は我々が感覚する形あるものは種々の原因と条件が相乗・複合・融合して、依存して生じては滅しながら相続していると説かれ、ものは神が造ったのではなく、さらに我々の身体には不滅の靈魂は存在しないと説かれていたことを知り、驚きました。

それぞれのものには何か永遠不滅なものが内在しているのではないかと思い込んでいたのが人の常であります。実はそのようなものは本来欠けていたと説いたのが空の思想なのです。

何かあるという思い込みが高じて、人はそれを実体という形に作り上げてしまいます。ところがこの世間に存在するものはみな種々の原因と条件が相乗・複合・融合し、依存して生滅しながら相続しているので、ものそのものが不滅であつたり、ものの中に永遠不滅の実体があつたりなど考えられないのです。固定したもの、一定のもの、不壞のものはないのです。それでも人は何か不滅、不变、不壞のものがあると思ひ込むのです。これが煩惱を生むもとになり、人はその煩惱で迷い、苦しむのです。

釈尊は、そのような永遠不滅の実体はすべての形あるものには欠けているといい、一切法は空であると表現しました。その理由としてものは衆縁和合しているからです。つまりも

のは縁起しているから空であるという教えです。ここではじめて高等学校時代に水野博士から聞いた空の意味を理解できただように思っています。

身体に不滅の靈魂は内在しないことが解って、私は靈魂の呪縛から解放されました。皆様の中でもし私の靈魂はあると考えている人がおられたら、あなたの靈魂は生まれる前に両親のいずれにありましたかという質問にお答えになられるでしょうか。これを考える前に「私」の個体が誕生以前に両親のいずれにあつたかを考えてみられるのも大切です。私は仏教を学ぶことで靈魂説の不条理性が解りました。

今日、仏教葬儀では死者の靈魂を癒すことを目的としていますが、それは遺族のことを考えた上での方便であれば、非難すべきではありません。しかし仏教は正面きつて靈魂説を説いているというのであれば、それは釈尊の面汚しといわなければなりません。

釈尊の言葉として「死に捉えられた者を子も親も親戚も救い出すことはできない。この道理を知つて、戒律を守り、速やかにニルヴァーナに至る道を究めなさい」と『法句経』にありますように、死んだ人の靈魂を考えるより、死者を前にしていざれ死を迎える者は一切の煩惱から解放された境地に入ることに努力すべきだといい、身心ともに健康で安らかに死を迎えるようにすべきだと教えています。

『ブッダのいいたかつたこと』講談社学術文庫を参照された

二、一切衆生悉有佛性

釈尊はだれでも佛になれる教えを説かれましたが、死後、釈尊を神格化した結果、仏教の伝播の過程で佛になれるのは釈尊だけと説くようになりました。佛になれるという教えは衆生には無縁のものとなつたのです。

時代が下り、紀元前一世紀半ごろから經典が文字化されまると、そこにだれでも佛になれるという記述を読み取り、一切衆生の成仏が説かれるようになりました。その理由の一つとして佛性の教えが説かれました。

佛性の教えは五蘊から構成される生類に差別なく内在するといい、一切衆生の無差別を主張しました。

佛性がだれにもあるのだという教えを信じて、精進することの大切さを大乗佛教徒は強調しました。そしてその佛性は求める者には必ず実感されるが、求めない者には自覚されないばかりか、ないに等しいと説くのです。つまり佛性は求めれば必ず得られるもので、つねに実在しているという教えです。

後代になると、この佛性の内在説が誤解されて、人は生来、佛として生まれてきたと考え、すでに覺りを得ている状態と同じだと説く者が現れました。さらには佛心を持つて生ま

れていると説く者さえ現れました。端的にいうと、性善を説くのが仏教だという者もいました。これらの考え方を吹聴する者は多くは天台宗や禅宗の出家者が多いようです。

参禪の折、私たちは坐った時すでに佛の姿と同じで、佛の覺りを表現しているのだと教えられてきました。その理由として人にはすでに佛性があるからだ、佛の本性があるからだと言っています。これをさらに引き継いで、坐禪はもともと佛としての坐禪であるから、覺りを求めることも覚りが何かを考えることも必要としないと教えるまでになりました。これが発展して只管打坐、すなわちひたすら坐るだけでよいと

いうことばの理由付けになつたようです。

私からいわせれば、このような佛性の解釈は最悪の誤解です。佛性思想は生來人が佛として生まれてきたという教えではありません。覺りを求める必要も、考える必要もないと言いますが、禅宗では菩提心を起こして修行することを説かないのでしょうか。菩提心を起こすとは覺りを求める心を起こそとありますか。

禅宗では身心脱落という言葉を頻繁に使いますが、釈尊が得られた覺りの境地はこの禅宗の身心脱落で言い表すことができると考えます。身心とは五蘊のことであり、脱落とは一切の煩惱から抜け出すことをいい、一切の束縛からの解放です。この解釈が間違いでなければ、禅宗でも最初から煩惱か

ら脱落することを求めて坐禪することだったと考えます。最初から佛であつたなどどこにも禅宗でも説いていなかつたと考えます。

人の心は佛性であり、したがつて本性は性善であるという人がいます。インド仏典にこのような教えは説かれていません。人の心は佛性とは同じものではないことが、佛性思想を説いた『涅槃經』にはつきりと説かれています。

佛性は菩提心を起こし、佛性の内在（仏になる可能性）を信じて八正道を実践することで佛性の芽が生じて、その実践を継続して成仏した時にはじめて佛性を体感し、顧みて佛性の内在を自覺できると『涅槃經』では説いています。

私は佛性思想を通して人はだれでも八正道を実践すれば佛になれるなどを教えられた。

〔佛性とは何か〕大藏出版、『涅槃經を読む—ブッダ・臨終の説法』講談社学術文庫を参照されたい。)

ホ、菩提心とは一切知を求める心

一切知とは世間のことすべて知り尽くすことを言います。すべての大乗仏教經典に「菩提心」は仏教信仰の最初に起こす心であり、つねに持ち続けなければならない心だと説かれています。

仏教辞典には決まつて菩提心とは上求菩提・下化衆生、つまり上に菩提を求め、下に衆生を教化しようと決意する心

仏教を学んでわかつたこと（田上）

であると説明されている。この意味はまちがつてはいません。菩提心の本来の意味は覺りを得たいという決意を表しています。この言葉の淵源を訪ねると、原始仏教經典の中にアンニヤーチッタ (anñācittā)、漢訳で了知心という用語を見つけることができます。これは佛が説かれている道理や教えを知り尽くしたい心だと説明されています。經典ではこの心を動物でさえ起こしている例を挙げています。了知心はどちらかといえば自己の完成を求めて釈尊の覺りが何であつたかを知り尽くしたい、そして釈尊と同じように仏になりたいという気持ちを表す言葉がありました。

これと同じように入乘佛教徒の間で使われ出した「菩提心」も釈尊の覺り (anuttarasamyakṣambodhi) を求める心であります。その覺りは世間の道理、つまり衆縁和合のダルマを熟知し、それを体系化した四諦を正しく理解することでありました。その境地はプラジニャー (prajñā)、漢訳して慧 (般若) です。本来、菩提心はこの慧を求める心です。

ところが大乗佛教の經典では利他行を標榜して單に個人の完成に止どまらず、利他を強調して一切衆生、つまり六道のあらゆる衆生の生きざまを知り尽くし、彼らの教化と救済に心を向けることを最初から決意しなければならないと考えました。

そこで菩提心を単に慧の完成だけでなく、利他行の完成、

すなわちジニヤーナ (jñāna)、漢訳して智を完成することにまで高めることを説き、ここに菩提心は智・慧を求める心という意味付けがなされました。これが先に述べました上求菩提・下化衆生の意味であります。後には下化衆生が強調され、菩提心は自未得度先度他の心を表す言葉として意味が限定されるようになりました。

（『菩提心の研究』東京書籍刊を参照されたい。）

ヘ、釈尊は死んでいない

釈尊は八十歳で亡くなられたと、わが国の仏教徒は從来教えられてきました。伝記を読みますと、クシナガラで血がほとばしるほどの下痢に苦しみながら亡くなられたと書かれています。その部分だけを読みますと、壯絶な死であつたと想像され、また、皆に惜しまれて永眠され、火葬されたと理解してしまいます。ところが『原始涅槃經』の後半部分には釈尊はニルヴァーナ（涅槃）に入ったとアヌルッダはアーナンダに告げています。この涅槃とは解脱という意味ですが、肉体、つまり物質的要素から全く解放された状態をいい、禪の境地に入つたままでいる境地を意味しています。それが具体的にどんな状態で、境地であるかを私たちが文献の中から知るよしもありませんが、これこそ宗教的信仰の上で最も大切な意義を持つていると考えます。

この經典は物質としての肉体は滅びる（色身無常）のです

が、三昧の境地としての「いのち」は不滅（法身常住）だという信仰を伝えているのです。その「いのち」は教えとして人々の中に生き続け、支えとなり、明かりとなり、柱となっているという信仰です。

これは後に紀元四世紀頃に創作された『大乗涅槃經』にも受け継がれました。ここには釈尊は、大いなる三昧の境地（大禪定窟）にいて一切衆生を觀察している、という言葉を残して涅槃に入られたと書かれています。つまり信仰の上では、釈尊は生き続けているということです。

すでに数年にわたって講義でも述べてきたことですが、この經典を基にして造られたと考えられるのですが、現存するわが国以外の仏教国である涅槃像はみな例外なく、眼を半眼に開いています。とくにはつきりと見られるのはタイのワット・プラケオ寺院の涅槃像で、それの半眼はその背後に坐禅している二体の仏像の半眼とそっくりなのです。つまり涅槃像の佛は生きていることを表しているのです。

ところがわが国の絵画にみられる涅槃像は二・三ヶ寺の絵画以外はみな目をつぶっています。つまり色身無常の信仰であつて、他国の例のように法身常住の信仰ではありません。わが国では法身常住の信仰を基に仏教を説かれなかつたところから、入滅、仏滅などの言葉が死の意味として理解され、薄っぺらな信仰になつてしまつたと考えます。

仏教では釈尊は死んではないというのが本来の信仰であります。

ト、仏教にも差別思想があつた

五十歳代になつて、『婦人公論』という雑誌の座談会の記

事を読み、仏教の性差別に関心を持ちました。研究してみますと、仏教教理と関わる性差別の内容がいかに多いか、ほんとうに驚きました。周知のように女人五障説や变成男子説などです。とくにその内容に関する大乗仏教經典の表現には仏教の恥部と言えるほどのものがあります。仏教研習者は仏教の性差別に関する研究はタブーとみなし、触らぬ神にたたりなしと積極的な研究を避けてきていることを知りました。

ある時期、この研究成果を発表したり、雑誌に連載したり、最後に一冊の本として出版したりした頃には、周りから変わり者と陰口を叩かれることもありました。

女人成仏についてはどの仏典でも説いていますので、研究者は男女は平等に成仏できると仏教では説いていると口を揃えて唱えていますが、実は、彼らはまだ仏典の真意を読み取つていません。

原始仏教經典から通して言えることは、仏教では女身のままでは成仏できないという考えが基本にあることです。つまり女身不成仏が仏教の成仏思想にあるのです。道元禪師も『正法眼藏』の中で、これが正伝の佛法だと述べておられま

す。女身では不成仏ですが、变成男子すれば女人も成仏が可能となります、というのが仏典の説き方であることを知りました。

(『仏教と女性』 東京書籍を参考されたい)

チ、經典には釈尊の著述がない

まだ、仏教を学んでいなかつた頃は、經典はみな釈尊が説法されたものであるとともに、釈尊自身が執筆されたものだと考えていました。ところが仏典中、最も古いとされる『法句經』や『スッタニパータ』でもみな弟子たちによつて編纂されたもので、釈尊自身が書き残されたものでないことを知り、驚きました。

釈尊の教えは文字に著さず、弟子たちの口伝によつて伝えられたのですが、紀元前一世中頃に文字化されて、はじめて多くの人の目に触れることになりました。一つの經典の内容でも一、二〇〇年経るうちに、最初に記憶された經典の文章とはかなりの部分が異なつていると考えられます。したがつて釈尊の教えは厳密には正しく伝えられているとは言えません。

大乗仏教が隆盛になると、文字化された經典を読んだ人々がその内容を時代に適応するように説法を試みました。そこには仏教思想に変化がみられました。つまり釈尊の教えに新たな解釈を加えたり、覚りへの新しい道を示したりする人々

が現れました。これによつて大乗仏教特有の經典が盛んに創作されるようになりました。この創作された經典がわが国で各宗派で読まれてきたのです。

これらの創作された經典に書かれている教えは釈尊が説法されたものだと經典自身が述べています。その著者はだれも釈尊の説法を直接聞いたのではないであります。つまり大乗仏教の經典は釈尊の説法集ではないのですが、いかにも釈尊の説法を聞いたかのように書いています。さらに經典の著者たちは自分の名前を伏せて、すべて記述の内容は直接釈尊から聞いた教えの記録であるように書かれています。

このように大乗仏教の經典はだれが書いたものかわかりません。そしてそれがどこで作られたものかも全く不明なわけです。

極言すれば、現在、仏教研究の資料として使つてある大乗仏教の經典は著者、成立年代、製作された場所など正確にわかつているものはないに等しいのです。また、原始仏教の經典についても、いつ、だれが、どの經典を編纂したのか、どのようにして伝えてきたのか、はつきりと確認できるものはほとんどないのです。このような不明なものばかりに満ちた佛教文献をもとにして仏教研究は続けられてきました。仏教研究がただ文献だけを頼りにした文献学を主流とするようであれば、恐らく仏教は人々の関心からはなれることでしょう。

しかし文献の成立を正しく把握することは難しいとして、も、おおよその流れをつかんで、どれが佛教思想の源流であつたのかを知り、その源流に眞の佛教があることを人々に説き示すことがこれから仏教学者の役目ではないかと考えます。今日のように宗派がセクト主義を諷っている限り、釈尊の教えは正しく理解されずに終わってしまうでしょう。ご清聴ありがとうございました。